

## 視点(1879)

### 金融経済の入口戦略・出口戦略についての考察!!

(流通経済編)

アメリカが1970年のモノ離れ現象と1971年のニクソンショック(ドルの金本位制の廃止)により、アメリカ経済は産業経済(付加価値を直接創出のモノづくりを中心とする実体・実物経済)から金融経済(付加価値を間接的に創出する非モノづくり=金融産業による波及経済)へと進みました。この経済現象を資本主義の最終場面と見るのか、新しい資本主義の姿と見るのかは、今後20~50年後でないとは解明できません(六車流:流通・マーケティング理論)。

いずれにしても、1970年代からのアメリカが金融経済の道を歩むことにより、世界中の国が少なからず追従せざるを得ない体制になりました。日本も1973~1978年の第1次・第2次オイルショックや田中内閣の日本列島改造論による積極経済の金融緩和による過剰流動性は大インフレ(1973~1975年までの狂乱物価・特に1974年の消費者物価は23%アップ)を招き、金融経済の道を歩み始めました。また、1985~1991年までにプラザ合意による超円高・ドル安政策(1ドル240円から70円まで円高)とそれに伴う金融緩和によりバブル経済が発生し、1991年に金融の総量規制と公定歩合の引き上げ(6%)のダブル金融規制により、バブル経済は崩壊しました。

1991年以降の日本の金融政策は、安全性を重視した金融理論の原理・原則に基づくレベルであり、特にリーマンショック後の世界的金融緩和の中で日本は相対的に金融緩和のスピードが遅かったため、2008~2012年まで著しい円高とデフレ経済が続きました。

このような中で、日本は2013年の安倍内閣のアベノミクスによりデフレ経済脱却のための異次元の金融緩和政策(量的金融緩和=資金供給量の増大、質的金融緩和=超低金利・ゼロ金利)を行い、日本経済を名目3.0%の成長率(物価2%、実質1%)とさせる戦略を導入しました。

ここでの異次元金融政策とは、従来の適切な政策金利や適切な資金供給量の増大ではなく、「量的・質的金融緩和を同時に行い、かつ従来のレベルは異なるサプライズ型の金融緩和政策」です。

アメリカでは2008年11月のリーマンショック後に異次元金融緩和は実施させ、2014年10月まで6年の間、第1~第3次回数、4兆ドルの資金量増加を行いました(現在は2014年から毎月1兆円ずつの資金供給の緩和を減らし、10月末で資金供給量の増加はゼロとなっています)。

日本では、2013年4月からアメリカの異次元金融緩和から「5年5ヶ月遅れて」日銀(黒田総裁)が行い、マネタリーベース(資金供給量)で135兆円を270兆円まで2年間(2015年3月まで)行う金融政策を発表し、実施しています。かつ2014年10月には今までの年間70兆円弱を80兆円に、かつ短期国債のみならず長期国債をも購入する第2次金融緩和政策を発表し、実施しています。

問題は、この金融緩和政策の入口戦略と同時に、その後の出口戦略(資金供給量=マネタリーベースの適正化と適正な金利)をしないとハイパーインフレ(毎年10%以上の物価高)が来ることになります。

アメリカでは現在(2014年11月)は、金融政策の出口戦略を始めています。

F R Bの2014年9月に公表した「金融政策正常化の原則と計画」によると次の通りです(日経新聞2014年11月24日・経済の教室・慶應義塾大学講師の田幡直樹氏より)。

①第1段階は「テーパリングと呼ぶ債券購入額の削除」です。アメリカでは2014年1月から毎月100億ドルずつ削減して、既に終了(10月末)しています。

②第2段階は「中央銀行が保有する債券の期日到来分を再投資」することで、増大したバランスシートを維持し、経済成長や目標とする雇用安定と2%の物価上昇を下支えし、かつ弾力的かつ狭い範囲の金利を動かすことです。

③第3段階は「市場が金利変動に慣れた段階で、政策金利を徐々に引き上げる」ことです。

④第4段階は「金融・経済状況を見るから再投資を停止し、資金の吸収を図る」ことです

アメリカでは、2014年1月に始まった出口戦略の完了は、経済状況によっては「2020年」になると言われています。

日本も金融緩和の出口戦略と同じに、財政再建も同時に行うことを前提にすると、金融経済の緩和の出口戦略は「2025~2030年」(2017年の消費税引き上げ後から、実際の債券の残高の削減開始、その後10年間)まで続くと想定されます。

今、日本の経済評論家の中では、財政破綻や高インフレが「来るかどうか」ではなく、「いつ、どんな形で来るのか」(日系コラムニスト・平田育夫氏)に移っているそうです。

(株)ダイナミックマーケティング社<sup>+</sup><sub>6</sub>

代表 六車<sup>むぐるま</sup>秀之